

特集

第六十一回日本保育学会から

平成二十年五月十七、十八日名古屋市立大学で第六十一回日本保育学会が開かれた。実践・養成・学究それぞれ立場から多様な研究者が集まり、多くの研究発表が行われた。その中から三つの発表の概要と、学生が見た記念講演のレポートをご紹介します。

研究発表(1)

出来事としての「離乳食介助」

根津明子



なぜ出来事としての

「保育行為」を問うのか

当然のことながら、保育は保育者と子どもの身体を介したかわりを通して行われます。ところが当事者である保育者にとって、身体行為の問題は案外保育者の意識の外にあることが多いといえます。

特に、毎日繰り返し行われるルーティンワーク(食

事介助)、「おむつ交換」、「寝かしつけ」など)において、保育者が自身のかかわりの行為をその都度振り返り、その意味するところを反省的にとらえることは大変難しいことです。日常の行為は、その都度立ち止まって考えることなく行われるが故に、スムーズに進行するともいえるからです。

保育者が自己の身体行為を反省的に振り返ることが難しいもう一つの理由は、「保育行為」が通常養

護（ケア）の範疇^{はんちゆう}で語られるからです。それは常に世話をする行為として、保育者側の視点から語られます。しかし、子どもの側からすれば、それは、子どもの「主体性」を発揮する重要な契機です。つまり、「保育行為」は養護であると同時に、子どもの「潜在的自己教育力」^註に働きかけ、子どもが「自立・自律」的に行為することを援助するという教育的営みでもあるのです。

多くのテキストに記述されている「保育行為」はきわめて規範的で抽象度が高く、世話をする保育者側の視点から記述されています。しかし、実際の出来事としての「保育行為」は、本来は一人ひとりの保育者と子どもに固有のかかわりです。そのかかわりの中で初めて子どもの「主体性」は立ち上がります。

以下では「離乳食介助」場面におけるYの変化を追いながら、Yがどういう経過を経て自分から進んで離乳食を食べるようになったかを見ていきます。

事例「離乳食介助」における N保育者とY乳児のかかわり

（平成十九年六月～平成二十年一月）

保育記録は毎週一回定期的に行っています。記録の分析、解釈については、担当保育者へのインタビュー、保育記録などを参考にしています。

N保育者は二十数年乳児を中心に保育してきました。Y乳児（以下Y）は、平成十九年三月末生まれで、保育所には同年六月一日から通い始めました。「授乳」の段階では、三週間ほどでN保育者とYとの「相互応答のかかわり」の成立が見られるようになりました。ミルクの飲み方は比較的安定していました。

八月末、Yは(a)空腹になるとやたらにぐずり、N保育者がミルクを用意する様子を眼にすると、四肢を動かして活発に反応し、(b)哺乳瓶を熱心に見つめる様子が見られるようになりました。

離乳食は、九月初めから、本格的にスタートしました。

① N保育者は、Yを前向きにひざに抱きかかえ液体の入った匙をYの唇につける ↓ 匙を見ずにYの口が自動的に開く ↓ N保育者は「あーん」、「おいしいよ」の言葉を添えて口の中に匙を入れる ↓ Yの口が閉じる ↓ N保育者が匙をYの口から抜き取る ↓ 自動的に液体がYの口の中に残る ↓ Yがゴクンと飲みくだけず

離乳食が本格的に始まり、食事の形状がペースト状の段階に入ると、Yは前の一匙を口に残したまま、次の匙を受け入れることが多々ありました。口に一匙分を含んでから飲み下すまでに二分以上かかることもありました。

② 「あーん」と言いながらN保育者が匙をYの口元を持つていく ↓ Yは口を開き、匙を受け入れる ↓ Yは口の中にペースト状の食事を含んだまま口を閉じてあこは何となく動かしている ↓ N保育者は「もぐもぐもぐ」「こっくん」と嚥下を促そうとする ↓ N保育者が何度か言葉をかけているうちにYがやっと一部嚥下できる ↓ (c)ここまでが数回繰り返されるとYはぐずり始める ↓ N保育者は首をかしげながらミルクの準備に入る

九月後半、粒粥や固めの裏ごし野菜が登場します。しかしYはまずミルクを飲みたいので(d)離乳食を口に入れる前からぐずり始め、のけぞって食事を拒みます。

③ N保育者は哺乳瓶をYの見えないところに

置き、Yをひざに抱き食事を始めようとする

↓ (e) YはN保育者のひざの上で落ち着かず、匙を口に近づけただけでのけぞるようになって嫌がる ↓ N保育者は「わかった、わかった」と笑

いながら言い、哺乳瓶を取り出す ↓ N保育者が(f) Yに哺乳瓶を見せるとじっと視線を注ぎ

すぐにおとなしくなる ↓ 一旦Yがミルクを一口气に飲み、一休みするころあいに、N保育者は食事の匙をYの口に運ぶ ↓ まだミルクを飲みた

いときには、Yは顔を背ける ↓ N保育者はYの様子を見つつタイミングを見計らい、次にどうするかを決める

十月初めまでは、空腹と眠気がほぼ同じ時間になってきてくることが多かったのですが、十月の半ばを過ぎると、Yは(g)空腹にもやたらにぐずることが減り、午前に眠る時間帯と長さが一定してき

ます。十月末にYは突発性発疹を思い、のどの通り

のよいミルクを十分に飲ませることに戻ります。この時期になると、ミルクを充分飲んだ後でも、差し

出された匙を嫌がらずに受け入れることもでき、それまでよりは口の中で食べ物を噛み潰し嚥下することが何とかできるようでした。N保育者は食事を優先

したいという思いはもちつつも、Yの要求を優先し、しばらくは先にミルクということが続けます。

しかし、一月には、N保育者はYがぐずっても、時間がかかっても、できる限りまずは食事を取らせるようにかかわり、Yもそれをゆつくりと受け入れるようになります。

④ (h) N保育者がエプロンを付けるとYは二

コニコ見上げる ↓ 「ごはんだよ」「きょうはなんだろねえ」と言いながらN保育者は仕度する ↓ (i) Yは自分から食事台に寄っていく

↓ N 保育者はひざに前向きに Y を抱く ↓
「いただきます」と二人でお辞儀 ↓ N 保育者が匙に食事を入れ、Y の頭の後ろから右手を回りこませ、匙を Y の口に運ぶ ↓ Y は一瞬のけぞるようにするものの、(j) 自分の両手で匙を抱え込むようにつかみ、N 保育者と共同で匙を口に運ぶようにする ↓ N 保育者が「もぐもぐもぐ」おいしいねえ」と言くと、N 保育者の顔を下から見上げるようにしてにこりと笑いかける ↓ 八分ほど食べ終わると N 保育者は哺乳瓶を Y に見せる ↓ (k) Y はうれしそうにし、鼻を鳴らすような音をたてる ↓ (l) N 保育者が哺乳瓶をくわえさせると、自分の両手で哺乳瓶をしっかり抱え込むようにしてぐいぐい飲む

ミルクを飲むことについては、自分からミルクを欲するという Y の「主体性」が立ち上がっている様

子が (a) からうかがえます。しかし、①の段階では離乳食に関しては、最初条件反射的に口を開けるだけで、自分からそれを求めている様子はまったくありません。②の段階に入っても、(c) (d) に見るように離乳食ではなく、ミルクを求める姿があります。③の段階では、Y に離乳食に関する予測が成立しており、N 保育者のひざに抱きかかえられるだけでそわそわし、離乳食ではなく、まだ明らかにミルクを欲していることがわかります。十月に入ると、Y の生活が落ち着いてきており、(g) を見ると Y 自身にも生活の流れが予測でき、待てるようになっていく様子が見えます。④の時期になると、(h) (i) に見るように、Y は食事の仕度が始まるのを察知するとうれしそうにし、自分から食事台に近寄ります。(k) (l) に見るようにはやはりミルクが大好きではあるけれど、離乳食に対しても (j) のような様子が見え、Y の中に自分から離乳食に向かっていく意欲

が感じられます。

この事例に見るように、Yが離乳食を積極的に受け入れ、自分から食べることに意欲を見せるようになるまでには、「離乳食介助」場面におけるN保育者とYの絶え間ない相互交渉があります。この、相互交渉をどのように進めていくかの決定権は、当然のことながらN保育者側にあります。Yの側にはミルクを飲みたい欲求はありますが、最初離乳食への意欲は読み取れません。それは、N保育者とYとの相互交渉を通して生成されたと見ることができません。そうだとすれば、保育者が「離乳食介助」においてどのように乳児とかわるかわかるかということは、乳児の「主体性」の成立を左右する重要なかわりだといえることができるでしょう。

今後も出来事としての保育実践を記録、分析し、子どもの「主体性」が保育者や他児との、どのようななかかわりの構図の中で生成されていくかを読み解

いていきたいと思えます。実践の現場に身を置くたびに、保育者の仕事は本当に複雑で高度、そして本来はとても豊かな営みであることを痛感します。まだまだそのことを描ききれてはいませんが、そのことを、次代を担う養成校の学生たちにしつかり伝えたいということが私の願いです。

なお、いつも優れた保育実践を記録する機会を提供してくださる中野みなみ保育園の保育者の皆様に感謝いたします。

(東横学園女子短期大学 保育学科 幼児教育学)

註 日本保育学会会長の小川博久は「教育の本来の意味 (enzhin) は、学習者の潜在的自己教育力を前提にし、教育する側と学習者とのかわりの可能性を模索した上で、指導するということである。その点で教育は本来援助という言葉の範疇に入るということが出来る」と言い、保育と教育に通底する概念として援助を用いています。(『保育援助論』二〇〇〇年、生活ジャーナル、七頁)